

十三、大地の寂しさ

ある地では光明団は称名正因の異安心だという。ある地では光明団は法体づのりの異安心だという。ある地では光明団は信機秘事だという。ある地では光明団は地獄秘事だという。ある地では光明団は善知識だのみの秘事だという。ある地では光明団は自性唯心の異安心だという。ある地では光明団は聖道門の自力だという。ある地では光明団は欲生求道主義の異安心だという。ある地では、光明団は現世の一益法門を説くという。

だがしかし、称名念仏の数多きこと法然上人のごとくあっても、称名正因の異安心だとは言えない。

如来の本願の広大さを絶唱し讃仰することいかに深くとも法体づのりの異安心にはならない。

大信仏智に照らされて、いかに十悪五逆謗法闡提の機を凝視せよと説くとも信機秘事ではあり得ない。すでに善導は二種深信を説かれて罪悪生死の現実にさめ、曠劫以来の常没常流転を觀じ、無有出離之縁のわれを凝視していられるではないか。したがって、地獄一定底に落在して、往生極樂ならぬ歎樂を求むる心を否定して、純粹なる帰命に生きたとて地獄秘事ではあり得ない。

いかに如来に生きたもう聖人の人格を崇仰し絶対帰依すること世界随一なりとて、善知識だのみの異安心ではあり得ない。今の世に、人間をたのんで救われると考えるほどの愚者はいない。

いかに「薪に火をつけつれば離るることなし。薪は行者の心に譬ふ。火は弥陀の撰取不捨の光明に喩ふるなり。心光に照護せられたてまつれば、わが心を離れて仏心もなく、仏心を離れてわが心もなきものなり。是れを南無阿弥陀仏とは名けたり。」(『安心決定抄』)と説かれたるがごとく、機法一体、仏凡一体の信を高調すればとて自性唯心の異安心ではあり得ない。

いかに、南無阿弥陀仏に生きて、信仰は現実生活と不離であると説き、行住坐臥、念仏行に生き聖人の御歌のごとく生きぬかんと願じたとして、自力ではない。聖道門ではない。念仏道は、大乘菩薩道の至極である。他力とは無力ではない。本願の宗教とは無内容を意味しない。

いかに信一念に生きて、一生、文字通り、「求道精進せよ、一生は聞法のために費せ、六字中心の生活に更改せよ」と叫んだとて、信樂を無視した欲生主義の異安心ではあり得ない。

さらにまた、いかに如来の本願は現実人生に生きたもうことを高調して、正定聚を重く説くとも、そのことは、いよいよ彼岸の浄土の實在を信ずるものであって、往生浄土の言葉がある以上、一益法門ではあり得ない。

われらはむしろ、称名正因とあやまられるほど念仏行に精進せざる懈怠を慚じ、法体づのりどころか、常に如来を天地一番に讃仰すべきに、またしても煩惱の声のみに生きようとする現実を悲しみ、またしても高慢の頂に登ってわが十悪煩惱の現実を見失い、地獄一定底の無根の信に生きないで、またしても得たり顔の我慢がものを言

い、善如識だのみの秘事どころか、われは年々に聖人にふれて、いよいよ聖人に背をむけて反き奉れる自己に慚じ、摂取心光中の生活なるに、何すれぞ、一人悄然として生死の淋しきに泣くぞ。何ゆえにみ教えのごとく忠実に生きぬかざる！ 人生はただ、正法のためにあるのである。行住坐臥、大悲の願に生かされ、如実修行相応すべきであるのに、煩惱生活のみしげくして聖道門どころか、いまだ教えの一二を領解せらるにすぎない。されば途中に腰かけることなく、道草を食うことなく、芯がとまらぬように、一生求道精進不退転なるところにのみ、真の如来は生きたもうのである。しこうしてそれは無帰命無信心を意味しない。

われらは一切の雑音を超えて、み教えのままに如来招喚のままに生きぬくべきである。

ある人は私が俗人なるがゆえに、私の話は聞かれないと言ひ、ある人は僧侶でないがゆえに先生の話は聞かれるという。

ある人は、私が貝を拾いに行つたことがあるがゆえに鬼の念仏ととれて聞かれないと心に蓋をし、

ある人は「あの人が一文もお金をとらずに法を説けば聞いてやる。」と言ひ、

ある人は私が「狂雲々々」と呼び棄てにしたがゆえに師匠面をしていて聞かれぬと言ひ、

ある人は「先生はこれから、肉食をやめてただ菜食して法を説いて下さればありがたく聞かれる」と言ひ、

ある僧侶は、あの人には、系統をひいた学者の師匠を持たぬから駄目だという。

この種のことを幾十百と毎日聞かされる。

それらの一切を受け入れたならば、私には、ついには「死」よりほかはなくなる。私はこれらの声の一切を合掌の中に受け取りつつ沈黙してただ如来の声にのみ生きさせていただく。一切の批判や請求や忠告は年とともに変つてゆくようであり、年々細かなことになるようである。何ゆえに私にのみは、かくも多くの要求があるのであろうか。私は一切に対して落第である。ただ、私にあるものは底なき煩惱と、念仏行のみである。同胞よ許してくれ。ただ願わくば、私に奇抜や聖者らしきや非凡を求めて失望し、そのために如来の大行を見失うことをしてくるな。拝むべきはただ大行のみである。信ずべきは如来の本願のみである。私に対する批判や、忠告をけつして拒むのではないが。

深い気持では、私はだれ一人悪^{にく}みきることのできない弱い人間にされたのだ。それは私自身の正体を知らされたがゆえであり、人生の複雑さや、人間性を知つてきたがゆえであり、大聖たちの御心をほのかにしるぶがゆえであり、根本には、大悲に打ちのめされるがゆえである。憎むどころか、私が悪いのだ。四方八方へ相すまぬのだ。

この私の心は、だれをでも信じてしまう。すぐ兄弟のように思う。その悪い癖が、これほど思うと叱りつけたりする。だがそれは心安く思うからである。私だつて昨今に出会った人を叱ったりはしない。だが、この癖が時に人を怒らしてしまう。私の叱り方は悪かつたかも知れない。だが兄弟と思つてやつたのだ、許してくれ。

四月八日、今日は冷雨の降る寒い日である。益田支部を発つて杵束支^{きづか}部浄久寺にゆくべき日である。前回の自動車の失敗もあるので十時の汽車で三保三隅駅に着いた。しかるに何だ、杵束自動車は途中の橋の架け替えのために休んでいるという。困った。駅員の方は、長浜駅に電話で問い合わせてください。夕方五時でないと、長浜杵束間もないとのこと。仕方がない。長浜から午後五時で行くことにする。次の上りは、午後一時四分だ。それまでには二時間ある。駅の前には桜が満開だが、雨にぬれてさびしそうだ。春芳君は例の通りに、マントに身をまいて横になつて眠りはじめる。私は風邪が治りきらないので横になどなれない。春芳君が渡しておいて眠つた「大法輪」という雑誌を開いて見る。田舎の小駅、寒さが身にしむ。冬のオーバーでも着て来ればよかつた。古くなつた合のオーバーを△△さんにやつてまだ買えないのである。「大法輪」の中に「親鸞聖人の母」というのがある。聖人の母上は、吉光女、その御生家は源義親の第三子にあたる。すなわち源氏の出である。源三位頼政が以仁王の御令旨を奉じて、平家討伐の戦をおこし、宇治の平等院で討死し王もまた流矢に当たつて薨じたもうたが、時に皇后宮の大進という重職にあつた、聖人の御父、日野有範卿もこの戦に加わつて果てられ、吉光女も二子を伯父従三位範綱卿にとゞめて、自害されるという筋である。確かにこれに近い経緯があつたのであろう。幼時から不幸だつた聖人の稚児姿を思い、人の世のあわれさを憶うて、寒い小駅にお念仏する。

午後一時四分発、長浜に向う。駅に着き、やがて雨の中を一軒の旅館を見出し、お中食がすめば二時半、疲れで眠る。午後五時やつと自動車に入り、六時半頃、杵束につく。美濃地さんや、御院主が迎えて下さる。

「自動車の時間をよく問い合わせておかないで、昼席を欠いで相すまぬことでした。」と謝ると、ご院主さんが、「今日昼席は釈尊の降誕会なので大変な集まりでした。「光明」誌を読んですませておきました。電報でも一本入れて下さればよかつたのでした。こちらからは益田の小河さんに電話しましたら、十時お発ちとのことでした。」と言われる。その夜席は、雨ではあるし、ほんの少しの集まりである。

九日朝「おい起きよ！」という声がある。眼を開けば、枕辺の火鉢に小さい役僧さんが火を入れているところであつた。眼をつぶる。すると「おい！ きさまは、昨日何ゆえにみ法を安く考えたか！」と私を叱りつける声が聞こえる。本堂のご本尊さまのお叱りだ。「悪かつた。悪うございました。」雨だろが風だろが、どんな手段をとつても来ようとしなかつたか。」がぼとはね起きて床の上に坐る。もう寝てはいられない。さんざん私は叱りつけられる。そうだ悪かつた。三保三隅駅で、バスの車掌は、三隅から、折居、周布、長浜と迂廻すればタクシーで行かれる。八円くらいなに行くそうだと電話で聞いてくれたのだ。「大法より尊く重いものがあるか、大法唯

一、何ものよりも高う買えとは、汝の常の持言ではないか。」それであるのに、電報一本打たず、行かれるものを行かなんだ。来て見れば、安城村から来た小娘すら、「なぜ先生は、特別に車を仕立ててでも来て下さらないか」と言つたというではないか。「わが声は聞こえなかつたか。大衆の願いはわからなかつたか。」私の心は打って打って打ちのめされる。

床から立つた。便所に入つても、顔を洗つてゐる間も、私は叱られる。本堂に参進して御本尊の前、あの荘厳な黒塗の柱の宮殿の中に端嚴に立ちます御本尊を仰ぐさえお恥ずかしい。五体投地、二拝三拝、五拝、十謝、どれだけお許しを願つても、許してはく下さらない。ああ。許すことをしない。妥協を許さない。弁解の出されない、たつた一つの本尊。ひたひたとその摂取の大悲はわが心を打つに、何すれぞ、招喚の厳肅なる。頭を横にそらすことすら許されぬ久遠の眞実、ああ。わが心の邪妄、八万四千の煩惱の泡沫、大悲の眞実に打ちくだかれて、如来のみものを言いたもう。至尊の智慧光、愚かにして懈怠なるわが胸底を打ちのめして、寸毫の余す所もない。「百千万劫この重罪に服します。み心のままになさせたまえ。」

やがて涙にぬれつつ朝の勤行を終わり、部屋に帰る。春芳君も起きてゐる。今朝のことを語る。やがて御院主様に重ねて深謝して、丁重にお許しを請う。人は許して下さいが、ああ本尊の無声の声をいかにせん。慚愧、懺悔、いよいよ大法に全我を捧げます。やがて本堂では春芳君の丁寧な勤行が聞こえる。……愚人！ 再びこの懈怠をくり返すことなかれ！ 咄。(四月九日島根県にて)

今日、△△支部の調査報告書を見る。人の世の寂しいかな。つまりは私の不徳に過ぎない。しかし、みんなみな、もつともつと如来の眞実にふれようではないか。もつともつと深くみ教えを聞こうではないか。もつと深く、もつと正直に、もつと細やかにみ教えにふれようではないか。今からもあるであろう。私の言葉尻や、態度を非難するのはいい。しかしそのために如来を忘れてくれ。怒りに狂う心のままでは、本尊のみ声は聞こえないではないか。怒るところか、私は正しいと思う心にさえ如来のみ心はわからない。私はけつして人の前で恥をかかす気ではなかつた。私にもつともつとその人を信じて、頭から兄弟と思つていた。その人の一番の欠点、大衆はみな陰で言つても向かつては言えないこと、その闇の本拠、根本を衝かれて大地に手をつくかわりに、異安心よばわりをしたのでは、救われないではないか。

かつてある有力な支部が瓦解した。それは、その支部長が本派の僧侶で、他の町にその出張所があつた。初め光明団を大変に歓迎して下さつたその寺院は、やがて出張所の町にある大谷派の寺を敵として戦いつつてくれと求められた。私は沈黙して答えなかつた。本派も大派もお浄土は一つであり、本尊は一つである。なんで本派の手先になつて大派と戦われよう。ついにその寺院は怒つた。そして味方が敵に変わつて、支部長を辞し、逆に光明団排撃、支部全滅となつた。

その時私は支部が減びることよりも、外に何とも言えぬ寂しさに泣いた。それでも私はその方を今も悪めない。だれもかれも、人間同志の間では、言いわけも議論も仲裁も喧嘩も、等々のつまらぬことが間に合おうが、無常の前に、そして如来の前に、

何が間に合おう。本尊の前に、一切を沈黙して、久遠の聖旨を聞こうではないか。小さなこの世の中での、人間的立場を守りつづけようとして、本尊を盲にしたり尻にしたりすることは恐ろしいことである。自己の小さい名利の心、それにも勝ちを与え、如来の前でも勝利者となる、そんなことは許されない。如来の智慧光によって、魔の宮殿の奥の院をついてもらおうではないか。名誉心を傷つけられたと言って怒るということ、そのことがすでに、魔の宮殿が動いているのだが、魔の宮殿を打ちくだかないで、怒る心を正しいと間違え、さらにそれに邪妄を深め、はてしなく、本尊を弄んで流転することは悲しいことである。

念仏の心に帰った時、人は離れていた者でも、また一つになれる。しかし、別れてゆかねばならぬ時は必ず煩惱の心、怒りや呪いの心がもとである。これは人間離合集散のほとんど公式である。これを知るがゆえに、人の世の離合集散を見ると寂しい気がする。

ああ大地の上には、最後まで別れなくてもいい人が、そも何人あるのであろうか、春の日、人の世は殊に寂しい。私は近う近来、私の方から離縁状をつきつけたことはない気がする。

私の檀那寺の院主はお念仏はとなえますが、どうも人物が小さくて才がなく、尊ぶに足りませんから、私は去つてゆきました、という人がある。しかし、その人の前に、親鸞聖人がお立ちになつたら、はたしてお浄土までお伴するであろうか。聖人は深いみ心でお念仏なされる。その人は貪欲煩惱の心から、名利心を満足しようとする。聖人は少しもおとり上げにならないで、かえつてお叱りになつたとする。その人は必ず、聖人を去るであろう。念仏の聖人には念仏でお仕えすべきである。念仏以外のものは、すべて煩惱である。煩惱をもつて近よつて、聖人に難くせをつけて去つてゆく。今日の多くの同行はみなそうするのではあるまいか。

しかし聖人ならばお徳が高い。手つぎのご院主には徳がないという考え方、そこが聖人と違うところである。聖人のためには、すべて御同胞御同行であり、世々生々の父母兄弟であつて、聖人自らはけつしてお棄てにはならない。その聖人のご生活そのものが浄土真実なのである。それは聖人だから、私たちとは違うという思いで、自分を言わけし、許してゆくとところに、真の念仏を捨てた高上りした人間がいるのだ。自分の徳のないのはどうするのか。それはちようど「お前はお寺まいりするのだから、もつとよくていいはずだ。俺が芸者買いしても、俺は念仏者でないのだから許されてもいい。」という放蕩息子の言葉と同一である。聖人ならば、才徳のないご院主でもお捨てにはならないであろう。

高慢心や、名利心はななか胸底深くもぐりこんで、その正体を見せない。私は今静かに念仏申している。外には雨上りの陽がぼかぼかと輝いている。み法の旅、そして春の日、念仏の子の胸中は春の日は殊に寂しい。みな、念仏申しませう。